

Research into Japanese Ability: The Case of Students at Toyohashi University of Technology

—— General Remarks

Yasuyuki Nakamori

It is said that there has been a decline in the scholastic ability of university students in Japan, and the Japanese ability of those students today has declined as well. With this in mind, Nakamori and Yamada conducted research into the ability of students at Toyohashi University of Technology to read and write kanji in 2005. And we announced the results in the article.

Therefore, we strongly felt the necessity to conduct research into the Japanese ability of students including kanji ability. So we conducted research on the ability of students at Toyohashi University of Technology to read and write kanji, proverbs, honorifics, kanji idioms, kanji radical identification, kanji stroke order, etc in 2006.

The results of this research are presented in this bulletin and are divided into four separate article.

The authors of these and the topics are as follows:

General Remarks: Yasuyuki Nakamori

Junior High School Level Kanji Ability: Yoko Yamada

Proverbs, Kanji Idioms, and Kanji Radical Identification, etc: Hironobu Hibino

Honorifics, Kanji Stroke Order, etc: Yuko Suzuki

大学生の日本語能力の現状・総論

—豊橋技術科学大学生の場合

中 森 康 之

はじめに

平成 17 年度、「日本語法」受講者を対象として、小学 3 年生から中学校で習う漢字の能力調査を行った。「読み」と「書き」を記述式で出題したものであるが、正答率は、全体（読み＋書き）が、小学校で習う漢字 71.5%、中学校で習う漢字 57.8%であった。「読み」については、小学校で習う漢字 95.0%、中学校で習う漢字 76.0%と、日常生活で困る程ではないものの、「書き」に至っては、小学校で習う漢字 55.0%、中学校で習う漢字 39.6%と、非常に心許ない水準であることが判明した。

さらに、答案の分析の結果、「語彙力の不足」と「正確に書く能力の不足」が明らかとなった。前者は、単に漢字を知らない、書けないという問題ではなく、言葉そのものを知らないということである。後者は、きちんと正確に書こうとする意志、きちんと書くことに対する価値観の低下である。「だいたい書けていたら良いではないか」という意志（価値観）が感じらる答案が多く見られた。詳細な報告と分析は『雲雀野』28 号（2006 年 3 月）をご覧ください。

さてそれに引き続き平成 18 年度は、調査範囲を広げ、ことわざ・慣用句・四字熟語・敬語・表現などについて、記述問題・選択問題を含めて 6 回にわたって「日本語能力調査」を行った。また最後に期末試験として総合問題を出題した。総合問題は、全 6 回の調査で既出の問題を約 60%、新出問題を約 40%出題した。

なお、第 1 回～第 6 回までの点数は成績評価には入れず、第 7 回の総合問題（期末試験）の点数のみで成績評価することとし、学生にはシラバス及び第 1 回目の授業時に周知した。

調査の要領は、以下の通りである。

調査対象学生：一般基礎Ⅳ 選択科目「日本語法（C～I）」受講生

調査対象人数：第一回 254 人＋留学生 14 人＋社会人 2 人

第二回 262 人＋留学生 13 人＋社会人 2 人

第三回	252 人 + 留学生 11 人 + 社会人 2 人
第四回	248 人 + 留学生 13 人 + 社会人 2 人
第五回	247 人 + 留学生 12 人 + 社会人 2 人
第六回	254 人 + 留学生 11 人 + 社会人 2 人
第七回	257 人 + 留学生 13 人 + 社会人 2 人

* 欠席者がいるので毎回人数が異なる。

調査内容：	第一回	中学生程度の漢字①	100 点満点
	第二回	中学生程度の漢字②	100 点満点
	第三回	ことわざ・慣用句	100 点満点
	第四回	四字熟語・部首	100 点満点
	第五回	敬語・書き順など	100 点満点
	第六回	語彙・表現	100 点満点
	第七回	総合問題（既出 61 点 + 新出 39 点）	100 点満点
試験時間：	20 分		

また、今回の調査では、入学種別の統計も取った。入学種は、

- | | | |
|----------|--------------|-----------------|
| ① 3 年次学力 | ② 3 年次推薦 | |
| ③ 1 年次学力 | ④ 1 年次推薦（工業） | ⑤ 1 年次推薦（普通科など） |
| ⑥ 帰国子女 | ⑦ 留学生 | ⑧ 社会人 |

の 8 種である。

なお、前回同様、今回の調査も、日本人大学生の日本語能力の調査と分析を主たる目的とするので、原則として留学生と社会人は除いて考察することとする。ただし留学生と社会人については後で少し触れる。

それぞれの調査問題についての具体的な報告と分析は、各論をご覧頂くとして、本稿では総論として、全体的な結果報告と分析を述べることとする。

I 調査全体の結果（留学生・社会人除く）

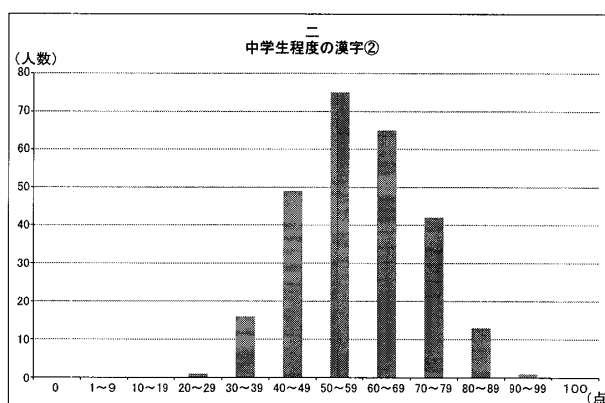
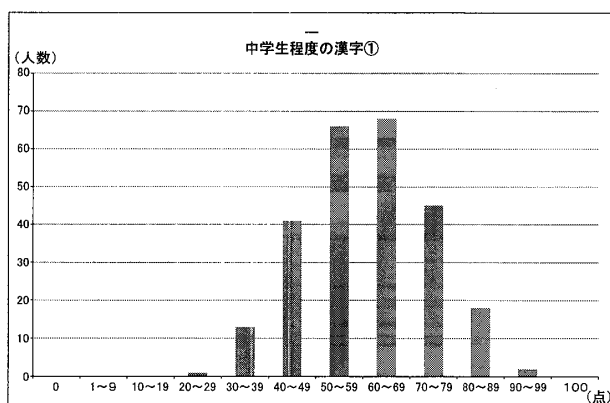
(点)	一 中学生 程度の 漢字①	二 中学生 程度の 漢字②	三 ことわざ ・慣用句	四 四字熟語 ・部首	五 敬語・書き 順など	六 語彙・表現	七 総合 (合計)	七 総合 (既出)	七 総合 (新出)
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1～9	0	0	0	0	1	0	0	0	0
10～19	0	0	1	5	0	0	0	0	7
20～29	1	1	9	28	0	0	0	4	136
30～39	13	16	46	48	0	0	0	12	114
40～49	41	49	61	69	0	2	2	66	0
50～59	66	75	62	66	0	1	10	167	0
60～69	68	65	53	24	24	13	19	8	0
70～79	45	42	16	8	112	42	71	0	0
80～89	18	13	4	0	97	117	134	0	0
90～99	2	1	0	0	13	78	21	0	0
100	0	0	0	0	0	1	0	0	0
平均点	60.1	58.6	51.0	45.2	78.4	84.5	79.7	51.1	28.7
最高点	91.0	91.0	83.0	74.0	98.0	100.0	96.0	61.0	38.0
最低点	29.0	25.0	16.0	16.0	2.0	40.0	47.0	24.0	14.0

(得点分布欄の数字は人数、点数欄の数字は点数)

留学生と社会人を除いた調査全体の結果は、以上ようになった。

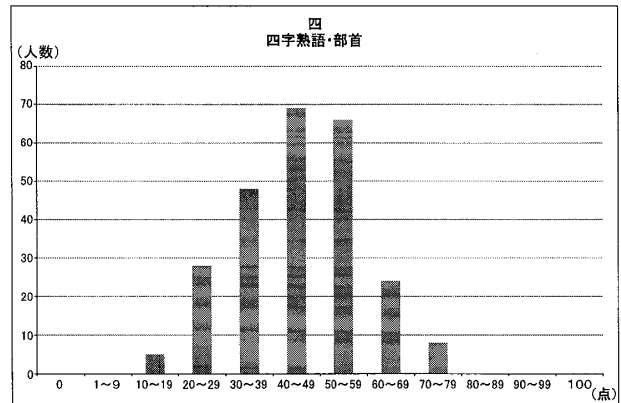
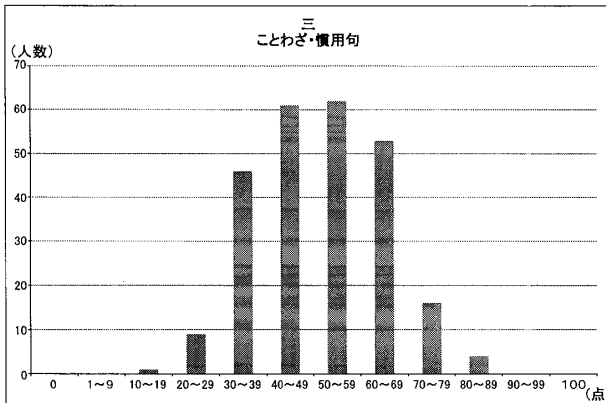
得点の分布を見てみると、第一回と第二回、第三回と第四回、第五回と第六回と二つずつでまとまりがあることが分かる。そこでグラフを掲げた上で大きく三つに分けて見ていくことにする。

1 第一回と第二回



第一回「中学生程度の漢字①」は最高点 91 点、最低点 29 点、平均点 60.1 点、第二回「中学生程度の漢字②」は、最高点 91 点、最低点 25 点、平均点 58.6 点である。①より②の方が少し平均点が下がっているものの、両者とも 6 割程度の正答率であり、前回の漢字能力調査の結果とほぼ同じ結果が出た。ただ選択問題を含めた今回と、記述問題のみで行った前回とがほぼ同じ水準であるという点は、多少気になるところである。

2 第三回と第四回



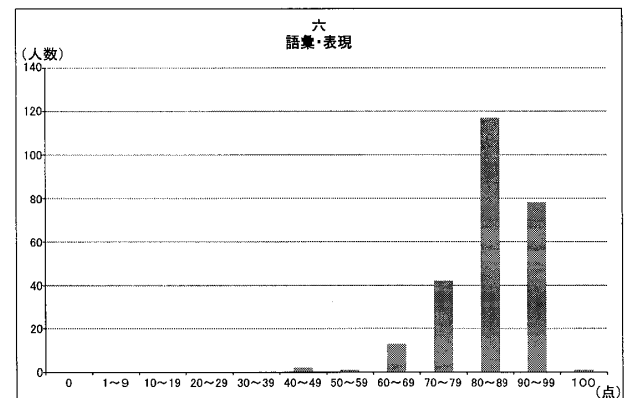
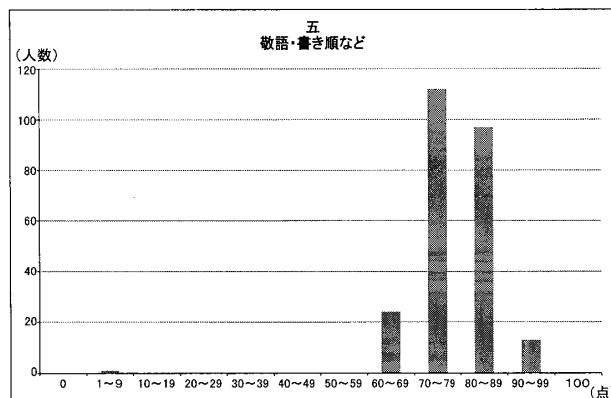
第三回「ことわざ・慣用句」は、最高点 83 点、最低点 16 点、平均点 51. 0 点、第四回「四字熟語・部首」は、最高点 74 点、最低点 16 点、平均点 45. 2 点とかなり低い水準となった。グラフを見ても分かるように、第一回、第二回と比べ、得点分布の山がかなり左によってしまった。

「ことわざ」・「慣用句」・「四字熟語」は、前回の調査で明らかとなった「語彙力の不足」を詳しく調査するために出題したのだが、予想通り（予想以上？）の低い水準であることが明らかとなった訳である。

詳しい分析は各論に譲るが、その語句を「ど忘れした」というようなレベルではなく、その語句の「読みも意味も知らない」というレベルのようである。

「部首」は、前回の調査で、「意味を考えずにとりあえず知っている漢字を書いてみた」という解答が多かったため出題した。予想通りの低い正答率であった。これも単にどれが部首かが分からないとか、部首名を知らないといった問題ではなく、学生たちは、漢字の成り立ちについて、全く関心がないのだと思わせるものであった。

3 第五回と第六回



第五回「敬語・書き順など」は、最高点 98 点、最低点 2 点¹、平均点 78. 4 点、第六回「語彙・

¹ この答えは明らかにやる気がなかったと判断できるものである。もちろん、答えがわからなくてやる気をなくしたのか、別の理由によるのかは不明。ちなみに 2 番目に低い点数は 60 点。

表現」は、最高点 100 点、最低点 40 点、平均点 84.5 点と、これまでと比べるとかなり高い水準となった。第五回、第六回の出題内容は、これまでの知識を問う出題とは少し質の異なった内容となっている。

「敬語」は、日頃余り使用することがないと思われる言葉遣いや言い回しをどの程度知っているかを中心に、出題し、「語彙」は、レポートを作成する際に書き言葉と話し言葉を区別しているかどうかを中心に、「表現」は、文章を書く際の主述の呼応やねじれといったものにどの程度気を配っているかどうかを中心に、出題した。このような日常生活で使用する頻度も高く、多少は気にかけている内容である上に、正解にも幅のある調査問題だったため、高水準の結果となったと思われる。しかし、今回のように問題として出された場合には、気をつけて解答するのだろうが、普段のレポート作成の際にはそれ程気をつけているとは思えない。ともかく、少し注意すれば学生のこのあたりの能力は高いと言ってよい。普段のレポートや日常会話などでも、少し注意をしてほしいと思う。

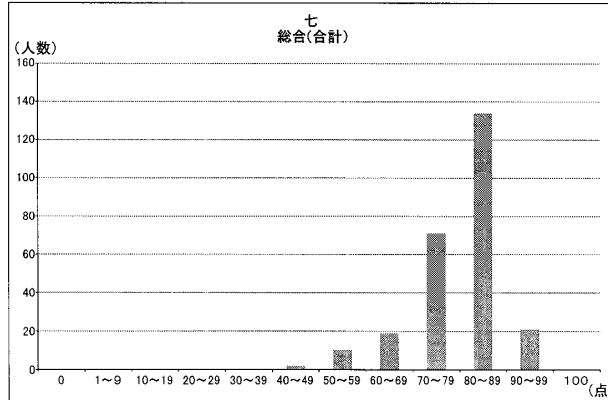
以上のように、第一回から第四回までのような純粋に知識を問う問題では低い水準であるものの、第五回、第六回のように日常生活に多少関わった問題では幾分高い水準であるという結果となった。このことから、第一回から第四回までで出題されている漢字、ことわざ、慣用句、四字熟語などは、学生たちにとって日常生活には関わりが低い、あまり必要のないものとなってしまっていることがわかる。彼（女）らの日常の言語生活（コミュニケーション）は、中学生程度の漢字を使った語彙、ことわざ、慣用句をあまり必要としないレベルのものなのである。

このような非常に少なく偏った語彙しか必要としない文章表現やコミュニケーションは、あまりに浅薄すぎると言わざるを得ない。このような言語生活が、豊かな感受性や感性、豊かな想像力、多様な価値観を育てるとは到底思えないし、しっかりとした論理的思考力を養うとも思えない。そしてそのような学生が卒業後社会に出て、それぞれの専門分野で自分の個性と能力を存分に発揮し、大活躍する姿を私は想像することができない。

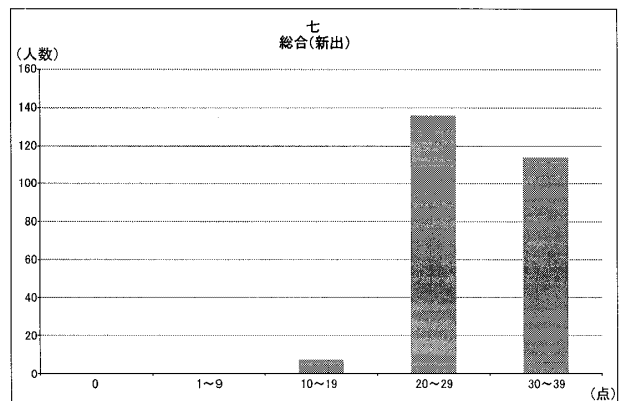
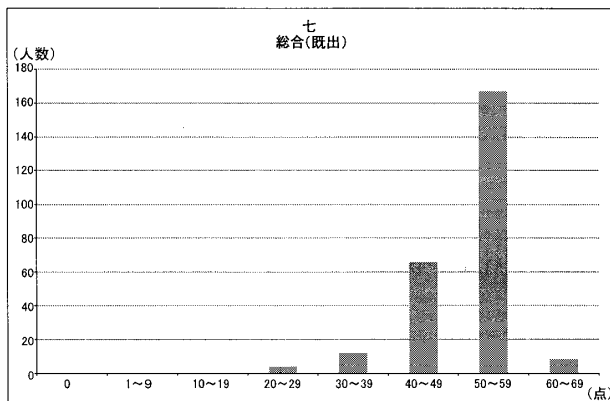
ところで、彼（女）らも、自分達の持っている語彙力や表現力では表現しきれない「あるもの」を表現したいと思うときがあるはずである。そのときどうしているのだろうか。もちろん表現の工夫をし、新しい言葉や表現を生み出しているのだ。しかし、その土壌が貧弱すぎれば、そこに豊かな新しい表現は誕生しないし、豊かな感性も表現されえない。恐ろしいのは、その程度で満足してしまうこと、自分の能力で対応できない時、「まあいいか」と諦めてしまうことである。最近授業のプレゼンで、「あなたが言いたいのはこういうことですか？」という質問に対し、「そういうことでいいです、めんどくさいから」と返答した学生がいた。「全くその通り」という感じでもないが、大きく外れている訳でもない、まあ「だいたい」合っている場合、もうめんどくさいから、「私が言いたいのはそういうことです」と言ってしまふ感性とは一体何なのだろう。実はそれが、漢字を正確に書かず、「だいたい」書けていたらいいではないかという価値観と根を同じくしているのではないだろうか。この「だいたい」の思想は、少なくとも前回や今回の調査、そして日常接していて、現代の大学生に静かに深く浸透しているように感じられる。もちろ

んそれは我が大学に限ったことなのかも知れないし、あるいは逆に大学生に限らないのかもしれないけれども。

4 総合問題（第七回）



総合問題では、最高点 96 点、最低点 47 点、平均点 79.7 点と、調査問題の結果と比べると非常によい結果となっていることがわかる。つまりみんな「勉強した」のだ。その点をもう少し詳しく見てみよう。



総合の既出問題は 61 点満点で、最高点 61 点、最低点 24 点、平均点 51.1 点、正答率 83.8% と非常に高い。また、新出問題は 39 点満点で、最高点 38 点、最低点 14 点、平均点 28.7 点、正答率 73.6% と、こちらも第一回から第四回までの調査結果と比べると格段に正答率が上がっている。

第一回～第六回までと違って、この総合問題の点数はそのまま成績となる。だから真面目に取り組んだのだろう。しかし学生の名誉のために言っておくと、一部の例外を除いて、ほとんどの学生は、成績には直結しない第一回～第六回までの調査問題も真面目に取り組み、その後の解説も真面目に聞いていた。また授業アンケートの「授業の総合評価」も高かったことから、学生たちはこの授業内容にかなり興味をもっていたことも分かる。

つまり、うまく興味を持たせれば学生たちは興味を持つし、多少はその重要性も認識するようになる。そして真面目に取り組んだ場合、一度学習したことの習熟度は非常に高いということなのである。これまでは、きちんとした学習の機会に恵まれなかったか、あるいはそういう機会に、

その重要性を認識するに至らなかったかだろう。

今回の調査結果を一言で言うならば、「やればできる」である。したがって、これまでやっていない理由を明確にし、動機付けと学習システムをうまく構築できれば、在学中に学生の日本語能力を向上させることが可能なのではないだろうか。その意味で非常に希望の持てる総合問題の結果であった。

次に総合問題を設問ごとに簡単に見ておきたい。

Ⅱ 総合問題の各設問について

1 漢字の読み

既出4点、新出6点の10点満点で、最高点10点、最低点2点、平均点7.7点、正答率77.0%である。漢字の読みは書きに比べて正答率が元々高いため、新出問題の方を多くした。既出が4点分あるにもかかわらず最低点が2点というのは残念だが、正答率の77.0%という成績は、読みは既出、新出にかかわらずほぼこの程度だということがわかった。

2 漢字の書き

既出16点、新出4点の20点で、最高点20点、最低点2点、平均点12.7点、正答率63.5%である。漢字の書きは正答率が低いため既出問題を多くした。それにしても既出が16点分もあるにもかかわらず最低点が2点というのはあまりにも低い。正答率が63.5%しかないというのも残念である。試験勉強をしなかったのか、したにもかかわらず点数に結びつかなかったのかは不明だが、いずれにしてももう少し漢字を書けるようになってほしいものである。

3 ことわざ・四字熟語の完成（穴埋め）

既出8点、新出2点の10点満点で、最高点10点、最低点2点、平均点8.9点、正答率89.0%である。ことわざや四字熟語は調査問題で非常に正答率が低かったため、既出を多くした。そのため正答率が高くなったようだ。そのような中での最低点が2点というのは、試験勉強をしていないとしか言いようがない。ことわざや四字熟語のような知識を問われる問題は「学習する」ことによって正答率が上がることが確認できた。

4 ことわざ・四字熟語の意味

既出9点、新出1点の10点満点で、最高点10点、最低点4点、平均点9.7点、正答率97.0%である。この設問では出題ミスで既出を9点としてしまったために正答率が非常に高くなった。そのためかえって、「学習」すれば知識として身につけることができるのだということが明らかとなった。中学生程度の漢字は、正答率が低いといえども、学習する機会はそれなりにあったはずだが、ことわざや四字熟語に関しては、それ以上に学習体験が少なかったのではないだろうか。

それにしてもこのような非常に高い正答率の中で、最低点の4点というのは、明らかに試験勉強不足である。

5 ことわざ・慣用句・四字熟語の読み

既出2点、新出3点の5点満点で、最高点5点、最低点0点、平均点3.8点、正答率76.0%である。設問1の漢字の読みと同様に高めの正答率となった。最低点の0点は情けない限りだが、読みはやはり覚えやすいようである。

6 ことわざ・慣用句の使い方

既出3点、新出2点の5点満点で、最高点5点、最低点2点、平均点4.6点、正答率92.0%である。非常に高い正答率だが、○か×で答える問題なので正解する確率は2分の1ということで、まぐれ当たりという可能性も考えられる。

7 部首

既出3点、新出2点の5点満点で、最高点5点、最低点0点、平均点3.4点、正答率68.0%である。既出問題が60%分あることを考えると、新出問題の正答率はかなり低いということになる。最低点の0点というのは、試験勉強をしていないということだろうが、「知らないものは答えられない」ということが如実に表れている。漢字を部首で考えるという習慣は持ち合わせていないのだろう。このあたりは「何のために部首を知っていないといけないのか」といった疑問にも答えながら、部首の意味、漢字というものの意味をきちんと理解させるような機会が必要だろう。それにしても最近の電子辞書の普及で、漢和辞典を部首で引くことは皆無だろうが、もし引こうとしても、もはや引けない者が多いということである。

8 敬語

既出6点、新出4点の10点満点で、最高点10点、最低点2点、平均点8.5点、正答率85.0%である。思っていたより高い正答率となった。問題として出されたら答えられるレベルにあるということは、少し意識すれば、日常生活でも自然に敬語が使えるようになるということである。その意識付けが難しいといえは難しのだが、是非そうなってもらいたいものである。

9 書き順

既出3点、新出2点の5点満点で、最高点5点、最低点0点、平均点3.9点、正答率78.0%である。正答率は確かに高めではある。しかし出題されているのは、小学校で習う漢字である。それを考えると、いつでも書き順を意識して漢字を書いているわけではないのではないかという疑問が残る。それを調査する問題を今回は出題しなかったが、機会があれば調査したい。それにしても最低点の0点というのはどういうことだろう。

これも書き順とは何か、なぜ書き順があるかをきちんと理解させる必要があるだろう。「書かれた漢字（結果）が同じなら書き順などどうでもよいという認識を持っている学生も多いのではないだろうか。

10 誤りの多い漢字の読み

新出のみの5点満点で、最高点5点、最低点1点、平均点3.8点、正答率76.0%である。「読み」はどのような問題でも、やはりほぼ同じぐらいの正答率となるようである。パソコンや携帯電話で漢字変換をする際にも読みを入力するということを考えると、読みは他に比べると身近なものなのだろう。意味を知っているかどうかは別として、とにかく、「まあまあ読める」ことだけは確かなようだ。

11 語彙

既出3点、新出2点の5点満点で、最高点5点、最低点3点、平均点4.8点、正答率96.0%である。非常に高い正答率で驚いた。最低点の3点というのは、既出問題だけは正解したということだろうか。話し言葉を書き言葉に直す作業は、試験問題として出題されると意識するために正答率も上がるのだろう。

敬語同様、ここでもやはり「言葉に対する普段の意識の薄さ」が浮き彫りになった。改めて問われると出来るのに、普段は意識が薄いのである。高い正答率に驚くのは、日常の学生との会話やレポートから得ている感覚と大きくずれているからだ。

一口に日本語能力といっても、漢字やことわざなどのように「知っている、知らない」という性質の問題もあれば、敬語や語彙のように「普段の意識」の問題もあるのである。そしてそれらは深いところで繋がっているのだ。

12 表現

既出4点、新出6点の10点満点で、最高点10点、最低点2点、平均点7.9%、正答率79.0%である。

これも敬語や語彙と同じ。気をつければ79.0%の正答率になるのだから、試験の時だけではなく、普段文章を書く際にも気をつけて欲しいものだ。

以上のように、知識についての問題に関しては、一度学習したことの習熟度は高いが、それ以外のものは身につけていない。当たり前といえば当たり前だが、そういう問題に関しては、効果的な学習システムと機会をうまく提供する必要があるだろう。

また表現についての問題に関しては、多少の応用が利くということがわかった。知識に関する新出問題の正答率を見てみると、やはりこれまでにこういった学習の体験がなかったということが考えられる。念のために言っておくと、ここで体験と言っているのは、そういう授業がなかったということではない。小・中・高校、あるいは高専の授業で学ぶ機会があったはずである。し

かし何らかの事情により、それを自分の体験として持っていない、単に「授業で学んだが忘れてしまった」ということとはまた違った事態が起こっているということを言いたいのである。

それはさておき、今回の調査問題や総合問題で出題した程度のことは、やはり大学生としては最低限身につけていて欲しい、と思う。このまま社会人となってしまってよいはずがない、という問題ばかりだからである。

大学の教育カリキュラムとしてそのような機会を用意する必要があるのは間違いない。そして有効なシステムが提供できれば、効果があることは今回の調査で明らかとなった。そこで現在私は、二つのプロジェクトを進めている。一つは、WebCTを使ったインターネットによる遠隔授業システム（教材）の開発である。¹ 学生が自由な時間にインターネットにアクセスし、自分のレベルに応じて日本語力向上のプログラムを実践できるシステムと教材を準備している。

もう一つは、本学学生の多くを占める高専との連携である。有明高専の焼山廣志氏と共同で、「高専から技科大に継続する日本語（国語）コミュニケーション能力の向上に向けた教育プログラムの開発と、それに基づくオリジナルテキストの作成」²を現在進めている。

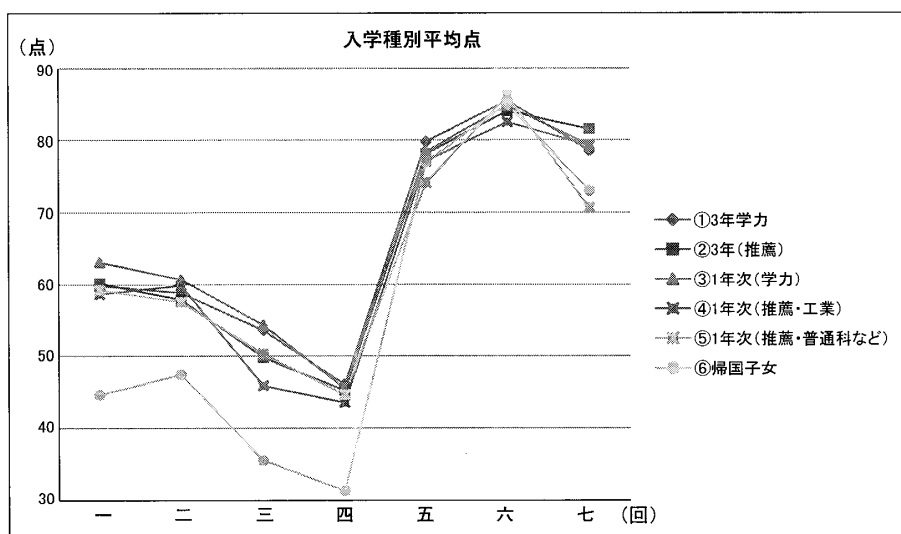
しかし最も重要なのは学生自身である。学生は学生で、あらゆる機会をつかまえて、個々の責任でレベルアップしてしてもらいたいものだ。そのためには、やはり学生の意識を高めることが不可欠だろう。現在、自分の日本語能力に不安を持っている学生は多くいるが、危機意識を抱いている学生が一体どのくらいいるのだろうか。少々、いや、かなり不安である。

次に入学種別に少し見ておきたい。

Ⅲ 入学種別の結果

1 3年次編入者・1年次入学者・帰国子女

まず、各回の平均点を折れ線グラフで示す。



¹ 平成 18 年度遠隔授業用教材開発プロジェクト（豊橋技術科学大学）。

² 平成 19 年度高専連携プロジェクト（豊橋技術科学大学）。

入学種別に平均点を折れ線グラフ見てみると、大体同じような形ではあるものの所々少しずつ違いが生じていることが分かる。

まず、第一回から第四回では、⑥帰国子女の平均点が低い。海外で生活することで、日本語の基礎・基本がどうしても身につけにくかったのかもしれない。他の入学種では第二回と第四回はほぼ同じだが、第一回と第三回ではばらつきが見られる。第一回「中学生程度の漢字①」で出題されている中学校1年程度の漢字や新出音訓よりも、第二回「中学生程度の漢字②」で出題されている中学校3年間で学習する常用漢字の方が、平均点の差が小さいのは日常生活で使用する頻度の違いだろうか。第四回の「四字熟語」は入学種にかかわらず「皆が知らない」ということのようなのである。第五回、第六回は全入学種ともほぼ同じである。そして第七回「総合問題」では、⑤1年次（推薦・普通科など）と⑥帰国子女の平均点が低い。きっとまじめに試験勉強をしなかったのだろう。

次にグラフの形を見てみる。全体の平均点では、第一回から第四回にかけて平均点は下がっているのだが、④1年次推薦（工業）、⑥帰国子女では第一回より第二回の方が平均点が上がっている。つまり、中学校1年程度の新出漢字や新出音訓より常用漢字の方が多少身につけているということになる。確かに日常生活では常用漢字の使用頻度の方が高いのかもしれない。⑥帰国子女の場合、教育課程の違いもあるのかもしれないが、④1年次推薦（工業）の場合はなぜなのか、よくわからない。

以下、順に各入学種別の表を示す。

① 3年次学力

(点)	一 中学生 程度の 漢字①	二 中学生 程度の 漢字②	三 ことわざ ・慣用句	四 四字熟語 ・部首	五 敬語・書き 順など	六 語彙・表現	七 総合 (合計)	七 総合 (既出)	七 総合 (新出)
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1～9	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10～19	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20～29	0	0	3	6	0	0	0	2	44
30～39	4	5	10	15	0	0	0	4	30
40～49	10	11	16	20	0	1	0	18	0
50～59	20	22	17	18	0	0	5	49	0
60～69	18	21	19	9	5	4	9	1	0
70～79	16	16	6	1	29	8	15	0	0
80～89	4	0	2	0	29	32	41	0	0
90～99	0	0	0	0	6	28	4	0	0
100	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均点	59.8	58.8	53.6	46.1	79.8	85.5	78.5	50.0	28.6
最高点	84	79	80	70	94	99	91	61	38
最低点	30	35	28	21	65	43	52	28	21

(得点分布欄の数字は人数、点数欄の数字は点数)

第一回、第二回の平均点は全体の平均点と同じくらい、第三回から第六回までの平均点は高く、総合問題は少し低い。第四回、第五回の平均点は各入学種別の平均点の中で1番高い。調査問題の結果から考えると、総合問題はもう少し平均点が上がってもよさそうである。3年次の学力入学者は、それ程試験勉強には時間をかけないのかもしれない。

② 3年次推薦

(点)	一 中学生 程度の 漢字①	二 中学生 程度の 漢字②	三 ことわざ ・慣用句	四 四字熟語 ・部首	五 敬語・書き 順など	六 語彙・表現	七 総合 (合計)	七 総合 (既出)	七 総合 (新出)
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1～9	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10～19	0	0	0	2	0	0	0	0	3
20～29	0	1	4	15	0	0	0	1	57
30～39	4	7	23	20	0	0	0	2	54
40～49	21	26	31	33	0	0	1	25	0
50～59	31	34	29	27	0	1	1	82	0
60～69	29	27	21	13	12	6	4	4	0
70～79	18	17	6	4	58	22	32	0	0
80～89	9	7	1	0	40	53	64	0	0
90～99	1	0	0	0	4	28	12	0	0
100	0	0	0	0	0	1	0	0	0
平均点	60.2	57.9	49.8	45.3	78.1	84.0	81.5	52.6	29.0
最高点	90	87	81	73	98	100	96	61	37
最低点	32	25	23	16	60	57	47	24	17

(得点分布欄の数字は人数、点数欄の数字は点数)

第一回、第四回、第五回、第六回の平均点は全体の平均点と同じくらい、第二回と第三回は少し低いが、総合問題は各入学種別の平均点の中で1番高い。3年次の推薦入学者は、身につけている知識は全体の中で平均的ではあるが、試験勉強にはまじめに取り組むようである。

③ 1年次学力

(点)	一 中学生 程度の 漢字①	二 中学生 程度の 漢字②	三 ことわざ ・慣用句	四 四字熟語 ・部首	五 敬語・書き 順など	六 語彙・表現	七 総合 (合計)	七 総合 (既出)	七 総合 (新出)
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1～9	0	0	0	0	1	0	0	0	0
10～19	0	0	0	1	0	0	0	0	1
20～29	1	0	1	4	0	0	0	0	16
30～39	2	2	4	8	0	0	0	4	19
40～49	3	4	7	6	0	1	0	12	0
50～59	5	12	5	11	0	0	2	18	0
60～69	13	7	8	1	3	1	3	2	0
70～79	5	6	4	3	8	5	12	0	0
80～89	4	4	1	0	18	15	15	0	0
90～99	1	0	0	0	3	14	4	0	0
100	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均点	63.1	60.7	54.4	45.6	78.4	84.8	79.3	49.8	29.5
最高点	91	87	83	74	92	96	96	61	36
最低点	29	30	22	17	2	40	57	32	18

(得点分布欄の数字は人数、点数欄の数字は点数)

点数のばらつきはあるものの、第一回から第四回まで平均点は全体の平均点より高く、第五回、第六回、総合問題は全体の平均点と同じくらいである。第一回から第三回までの平均点は各入学種別の平均点の中で一番高い。1年次の学力入学者は他の入学種者と比べると、「漢字」「ことわざ」「慣用句」「四字熟語」といった知識は多少身につけているようである。

④ 一年次推薦（工業）

(点)	一 中学生 程度の 漢字①	二 中学生 程度の 漢字②	三 ことわざ ・慣用句	四 四字熟語 ・部首	五 敬語・書き 順など	六 語彙・表現	七 総合 (合計)	七 総合 (既出)	七 総合 (新出)
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1～9	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10～19	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20～29	0	0	0	3	0	0	0	0	14
30～39	2	1	8	3	0	0	0	1	9
40～49	4	5	5	8	0	0	0	7	0
50～59	7	4	8	6	0	0	1	14	0
60～69	6	8	2	1	2	2	1	1	0
70～79	4	2	0	0	11	5	9	0	0
80～89	1	1	0	0	8	12	11	0	0
90～99	0	1	0	0	0	5	1	0	0
100	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均点	58.7	59.9	46.0	43.6	77.1	82.5	79.2	51.6	27.7
最高点	86.0	91.0	67.0	60.0	86.0	97.0	93.0	61.0	33.0
最低点	32.0	35.0	31.0	22.0	66.0	63.0	57.0	37.0	20.0

(得点分布欄の数字は人数、点数欄の数字は点数)

第一回の平均点より第二回の平均点の方が高いという特徴がある。

第二回の平均点は全体の平均点より高いが、第一回と第三回から第六回までの平均点は低く、総合問題は同じくらいである。そして第一回、第三回、第四回、第六回の平均点は、①から⑤の入学種の平均点の中で最低点である。調査問題の結果から考えると、総合問題の結果はよいということになる。1年次の推薦（工業）入学者は他の入学種者と比べると、身につけている知識は低いものの、試験勉強にはまじめに取り組んでいるようである。

⑤ 1年次推薦（普通科など）

(点)	一 中学生 程度の 漢字①	二 中学生 程度の 漢字②	三 ことわざ ・慣用句	四 四字熟語 ・部首	五 敬語・書き 順など	六 語彙・表現	七 総合 (合計)	七 総合 (既出)	七 総合 (新出)
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1～9	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10～19	0	0	0	1	0	0	0	0	2
20～29	0	0	1	0	0	0	0	1	5
30～39	0	1	1	1	0	0	0	1	1
40～49	1	2	2	1	0	0	1	2	0
50～59	3	2	2	4	0	0	1	4	0
60～69	2	2	3	0	2	0	1	0	0
70～79	2	1	0	0	5	2	3	0	0
80～89	0	1	0	0	2	3	2	0	0
90～99	0	0	0	0	0	3	0	0	0
100	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均点	59.3	57.6	50.3	44.7	74.1	86.1	70.6	45.6	25.0
最高点	70.0	86.0	63.0	56.0	85.0	97.0	87.0	59.0	30.0
最低点	47.0	30.0	28.0	19.0	66.0	73.0	49.0	28.0	14.0

(得点分布欄の数字は人数、点数欄の数字は点数)

点数のばらつきの範囲は狭い。第一回、第三回、第六回の平均点は全体の平均点より高いが、第二回、第四回は全体の平均点と同じくらい、第五回、総合問題は低い。第五回の平均点は、他の入学種別平均点の中でも最低点である。総合問題の平均点も全体の平均点と比べてかなり低い。留学生とはほぼ同じ水準というのは勉強不足としか言いようがない。1年次の推薦（普通科など）の入学者は他の入学種者と比べると、「漢字」「ことわざ」「慣用句」「四字熟語」といった知識はほぼ身に付いているものの、日常生活で必要とされる「敬語」は弱く、試験勉強には余力を入れないようである。

⑥ 帰国子女

(点)	一 中学生 程度の 漢字①	二 中学生 程度の 漢字②	三 ことわざ ・慣用句	四 四字熟語 ・部首	五 敬語・書き 順など	六 語彙・表現	七 総合 (合計)	七 総合 (既出)	七 総合 (新出)
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1～9	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10～19	0	0	1	1	0	0	0	0	1
20～29	0	0	0	0	0	0	0	0	0
30～39	1	0	0	1	0	0	0	0	1
40～49	2	1	0	1	0	0	0	2	0
50～59	0	1	1	0	0	0	0	0	0
60～69	0	0	0	0	0	0	1	0	0
70～79	0	0	0	0	1	0	0	0	0
80～89	0	0	0	0	0	2	1	0	0
90～99	0	0	0	0	0	0	0	0	0
100	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均点	44.7	47.5	35.5	31.3	77.0	85.0	73.0	48.0	25.0
最高点	49.0	51.0	55.0	44.0	77.0	86.0	82.0	49.0	33.0
最低点	38.0	44.0	16.0	19.0	77.0	84.0	64.0	47.0	17.0

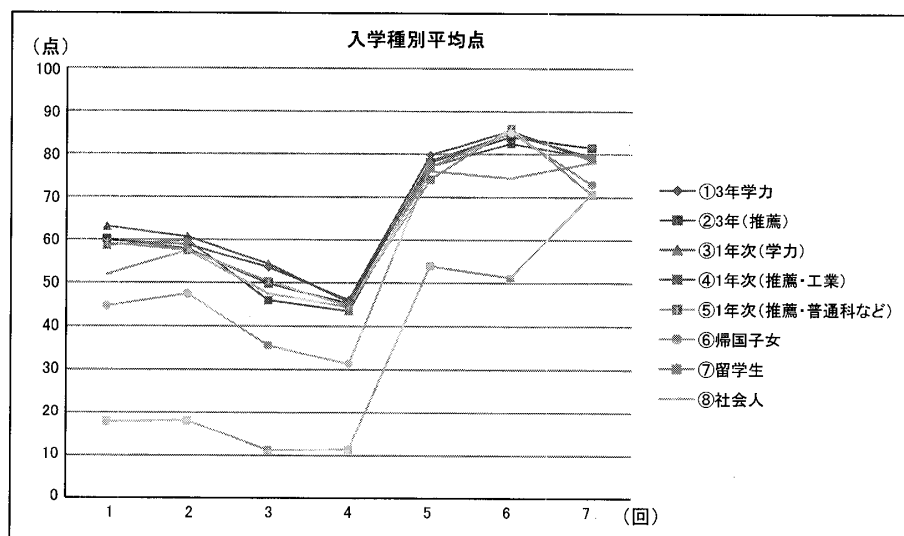
(得点分布欄の数字は人数、点数欄の数字は点数)

第一回の平均点より第二回の平均点の方が高いという特徴がある。

第六回の平均点は各入学種別の平均点の中で一番高いのだが、第一回から第五回までと総合問題の平均点は低い。第五回の平均点は全体の平均点と比べて低いという程度だが、第一回から第四回までと総合問題の平均点は、全体の平均点より格段に低い。帰国子女は身についている日本語の基礎の水準もかなり低い上に、試験勉強にもまじめに取り組んではいないようである。

2 留学生・社会人

最後に留学生と社会人について簡単に見ておきたい。



⑦ 留学生

(点)	一 中学生 程度の 漢字①	二 中学生 程度の 漢字②	三 ことわざ ・慣用句	四 四字熟語 ・部首	五 敬語・書き 順など	六 語彙・表現	七 総合 (合計)	七 総合 (既出)	七 総合 (新出)
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1～9	3	4	5	7	0	0	0	0	0
10～19	5	4	5	3	0	0	0	0	3
20～29	4	3	1	2	0	0	0	0	11
30～39	2	2	0	1	3	1	0	1	0
40～49	0	0	0	0	1	4	0	4	0
50～59	0	0	0	0	4	4	1	8	0
60～69	0	0	0	0	2	2	4	1	0
70～79	0	0	0	0	1	0	8	0	0
80～89	0	0	0	0	1	0	1	0	0
90～99	0	0	0	0	0	0	0	0	0
100	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均点	17.9	18.2	11.3	11.5	54.0	51.3	70.7	50.4	20.3
最高点	31.0	38.0	23.0	32.0	80.0	67.0	80.0	61.0	24.0
最低点	6.0	6.0	6.0	2.0	31.0	31.0	58.0	39.0	13.0

(得点分布欄の数字は人数、点数欄の数字は点数)

全体的に平均点がかなり下がってしまうのは、調査問題の性質上、仕方がないことだと言える。全体の平均点のグラフと比べた際の特徴として、第一回と第二回との平均点の差がほとんどないということ、第三回と第四回との平均点の差がほとんどないということ、第六回の平均点が第五回の平均点より下がっているということが挙げられる。留学生にとって、漢字の配当学年や「ことわざ」と「四字熟語」の覚えやすさの違いなど無関係だということは、当然といえば当然だろう。また、文章表現が難しいというのもっともだと言えるだろう。留学生ということを考えれば、当然の結果だということになる。このグラフの形は日本人と留学生との日本語学習の違いを如実に表していることになる。

この6回の調査結果から考えると、総合問題の平均点は非常に高い。留学生の学習意欲の高さ、試験勉強に対する真摯な態度は脱帽に値すると言ってよいだろう。

⑧ 社会人

(点)	一 中学生 程度の 漢字①	二 中学生 程度の 漢字②	三 ことわざ ・慣用句	四 四字熟語 ・部首	五 敬語・書き 順など	六 語彙・表現	七 総合 (合計)	七 総合 (既出)	七 総合 (新出)
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1～9	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10～19	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20～29	0	0	0	0	0	0	0	0	1
30～39	0	0	1	1	0	0	0	0	1
40～49	1	0	0	0	0	0	0	1	0
50～59	0	1	1	1	0	0	0	1	0
60～69	1	1	0	0	0	1	0	0	0
70～79	0	0	0	0	2	0	1	0	0
80～89	0	0	0	0	0	1	1	0	0
90～99	0	0	0	0	0	0	0	0	0
100	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均点	52.0	57.5	47.5	44.5	76.0	74.5	78.0	51.0	27.0
最高点	62.0	63.0	58.0	59.0	77.0	84.0	86.0	55.0	31.0
最低点	42.0	52.0	37.0	30.0	75.0	65.0	70.0	47.0	23.0

(得点分布欄の数字は人数、点数欄の数字は点数)

第一回の平均点より第二回の平均点の方が高く、第五回の平均点より第六回の方が低いという特徴がある。

第一回から第六回までの調査問題の平均点も総合問題の平均点も、全体の平均点と比べて低い。第一回と第六回の平均点は特に低いのは、社会人として日常生活で使用する頻度の問題なのだろうか。受講者が少ないので何とも言えないが、忘れてしまっているのかもしれない。

おわりに

調査の結果、やはり「語彙に関する知識の不足」と「言葉に対する普段の意識の薄さ」が顕著であることが明らかとなった。今回の調査で出題した漢字、ことわざ、四字熟語などは決して難解なものではない。工学部の学生にとって興味のないことであったり、入学試験で試験勉強の必要がなかったりと事情はそれぞれあるのかもしれない。しかし今回出題したことわざや四字熟語は、小学生向けの本にでも掲載されている内容のものである。そのレベルの知識が身につけていないということは決してほめられたものではない。というより、とても困ったものである。

彼(女)らは技術者である前に人間である。一人前の社会人としてそれにふさわしい日本語力、コミュニケーション力を身につけることは非常に大切である。さらに彼(女)らが技術者として自分の専門分野でその能力を存分に発揮しようという志を持つなら、その基礎となる日本語力を身につける必要があるだろう。

もちろん、過去のことを今更とやかく言っても始まらない。だからといって、このまま放置し

ておいてよいはずもない。考察の途中でも述べたが、「やればできる」ということも明らかとなった以上、学生への動機付けと、有効な教育プログラムを開発する必要があるだろう。

もう一つは、これも既に述べたが、「だいたい」の思想（価値観）の問題である。しかしこれについては、今回の調査結果の分析とはまた違った考察が必要になる。別の機会に譲りたい。

以上総論を述べた。それぞれの調査問題についての各論も是非お読み頂きたい。なお各論を担当しているのは、それぞれの調査問題の出題者である（ただし総合問題は中森が出題した）。